

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予報第1号(4月)について

このことについて、病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

予報第1号

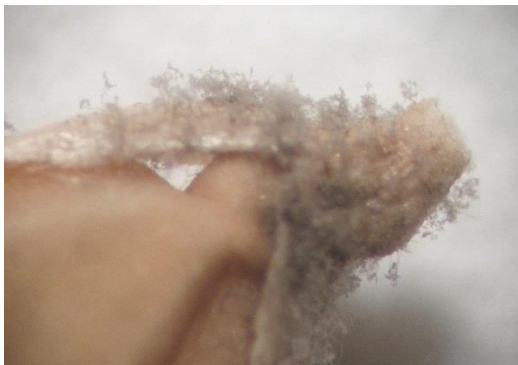
は種前からいもち病やもみ枯細菌病の対策に努めましょう

令和5年度12～3月に令和5年産水稻の保菌糶調査を実施しました[県内10品種、185サンプル(いもち病)、64サンプル(もみ枯細菌病)]。平均発生ほ場率はいもち病が20.5%(過去3年20.2%)、もみ枯細菌病が21.9%(過去3年5.1%)でした。

いもち病及びもみ枯細菌病の主な伝染源は保菌種子です。塩水選や種子消毒による種子段階での予防対策に努め、育苗管理を適切に実施し、発病が認められた苗の移植は行わないようにして下さい。

具体的な防除対策は、県ホームページに掲載している『令和6年度版病虫害・雑草防除の手引き』を参考にしてください。

URL : <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>



糶に形成されたいもち病菌



もみ枯細菌病の発病糶

ナシ黒星病の防除に努めましょう

昨年夏のナシの収穫時期には、多くのは場で黒星病の発病葉が確認されており、病原菌の越冬量が多い可能性があります。

落葉がほ場に残っている場合は早急に処分しましょう。また、今後1か月の気象予報でも気温が高く、降水量が多いとされており、黒星病の拡大の恐れがありますので、発病前からの予防的防除を心がけましょう。



図1 葉上の病斑（秋）



図2 葉上の病斑（夏）



図3 発病した幼果

4月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	4月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	やや多 並 並	やや多 やや多 並	やや多 やや多 やや少
なし	黒星病	—	多	多
イチゴ	灰色かび病 うどんこ病 ハダニ類	並 やや少 少	多 並 少	やや多 少 並
冬春トマト	灰色かび病 コナジラミ類	多 ³⁾ やや少 ³⁾	— ³⁾ — ³⁾	多 並
冬春ナス	灰色かび病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	やや少 多 やや少	やや多 多 並	やや少 多 並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（—）、やや少発生（—～±）、並発生（±）、やや多発生（±～+）、多発生（+）として示し、+-を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 冬春トマトについては令和4年度からの調査で平年値が無いため、現況（発生量）の欄には前年比で記載しています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス
URL: <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



①

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせをしています。
X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス
URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②



②

<予想される向こう1か月の天候 (令和6年3月23日～令和6年4月22日)>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間 (数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少10 並30 多60% 多い見込み	少50 並30 多20% 少ない見込み

(福岡管区気象台 令和6年3月21日発表1か月予報より抜粋)

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発病葉率 0.2% (平年 0.1%、前年 0.1%)

発病ほ場率 25.0% (平年 10.7%、前年 12.5%)

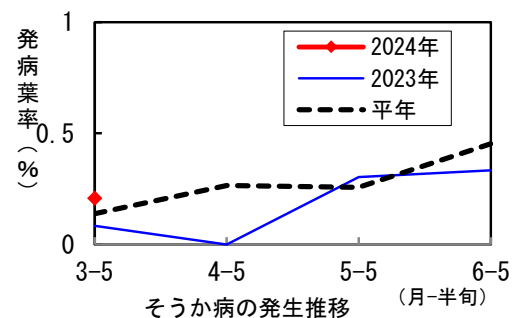
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。

イ 罹病葉は伝染源になるので除去する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 かいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

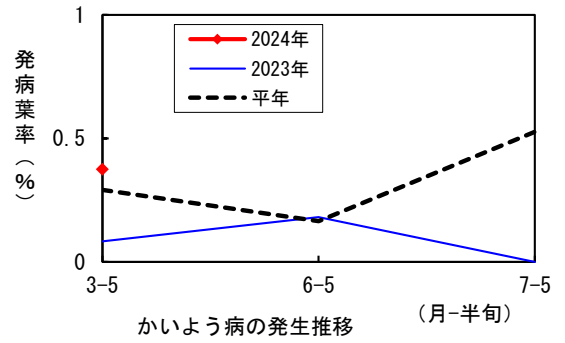
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.4% (平年 0.3%、前年 0.1%)
 発病ほ場率 50.0% (平年 14.9%、前年 12.5%)
 イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除は、発芽前・開花前の雨前に予防的に実施することが重要である。
- イ 発病枝や発病葉を除去し、焼却等適正に処分する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや少

※ 前年は4月中に防除を徹底したため、3-5~4-5で急減しており、前年4月は全体的に見れば平年よりやや多い発生状況であった。

(2) 予報の根拠

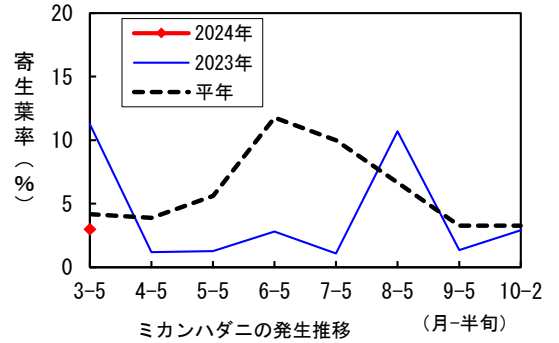
ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 3.0% (平年 4.2%、前年 11.3%)
 発生ほ場率 37.5% (平年 35.3%、前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- イ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布する。



【果樹：なし】

1 ナシ黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている (+)。

イ 2023年8月2半旬調査の結果、発生量は多かった (+)。

発病葉率:19.7%(平年1.4%、前年0.4%)、発病葉発生ほ場率:90.0%(平年59.2%、前年33.3%)
 発病果率:1.7%(平年3.4%、前年0%)、発病果発生ほ場率:60.0%(平年51.3%、前年0%)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 芽基部病斑等の発生状況には十分注意する。
- イ 薬剤防除は、開花直前から満開20日頃までが最も重要な時期である。
- ウ 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- エ 薬剤防除あたっては、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため異なる系統の薬剤をローテーション散布する。特にDMI剤やQoI剤、AP剤、SDHI剤を用いる場合は、同一系統剤の使用回数は春季防除で年1回、年間でも2回以内にとどめる。

【野菜：イチゴ】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.09% (平年 0.11%、前年 0.06%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

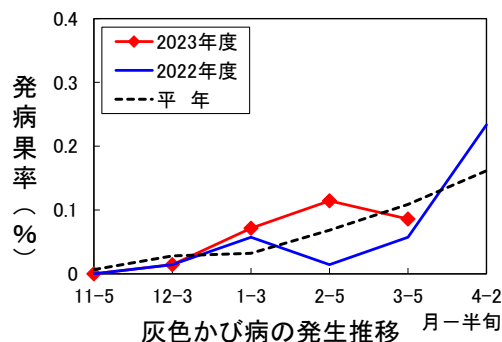
イ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

オ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的であり、薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

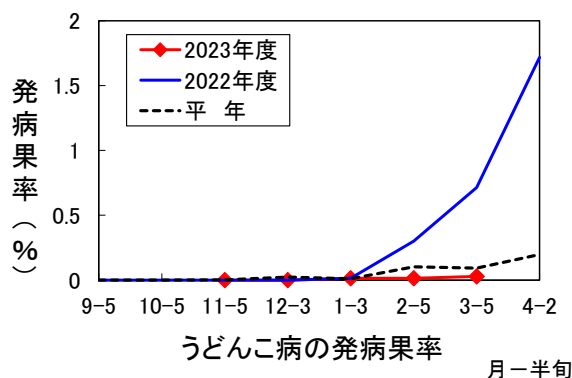
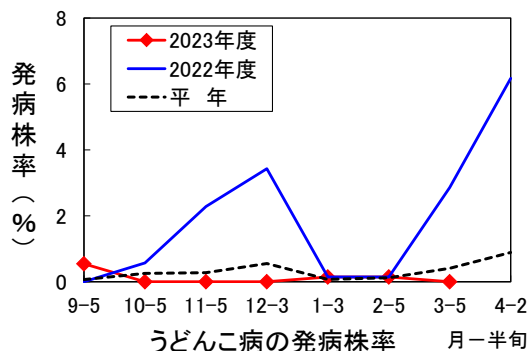
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一~±)。

発病株率 0% (平年 0.4%、前年 2.9%)

発病果率 0.03% (平年 0.09%、前年 0.71%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

オ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

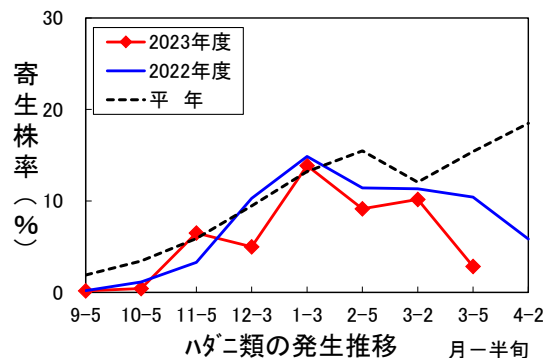
ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生株率 2.9% (平年 15.4%、前年 10.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので除



草を徹底する。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心がける。防除は摘葉後に行うと効果的である。

オ ミツバチや天敵を導入しているほ場では、それらに影響が少ない薬剤を使用する。

カ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。

<県ホームページ掲載の「令和6年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/704227_61920224_misc.pdf

【野菜：冬春トマト】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：前年より多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は前年より多かった(+)。

発病果率 1.8% (前年 0.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

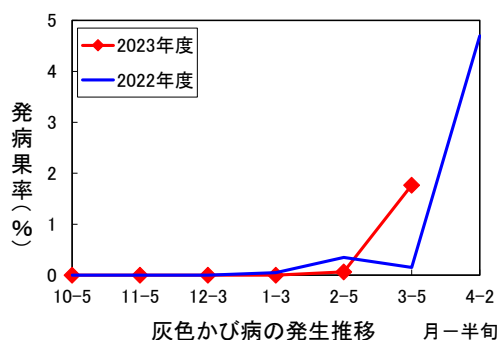
ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 花がらや不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。

ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。

エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

オ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は前年よりやや少なかった(-~±)。

寄生葉率 1.2% (前年 4.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

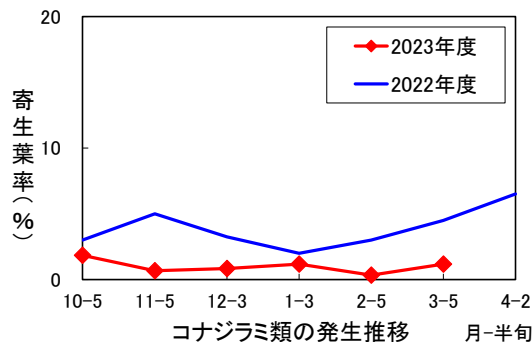
(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 施設内側に黄色粘着シートを設置するなどして発生状況を把握し、発生を確認したら、薬剤防除を行う。

エ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬春ナス】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

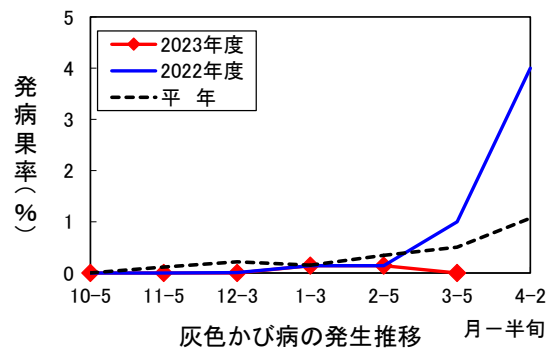
ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

発病果率 0% (平年 0.5%、前年 1.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 花がらや不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光を良くする。
- ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心がける。
- エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。
- オ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 すすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

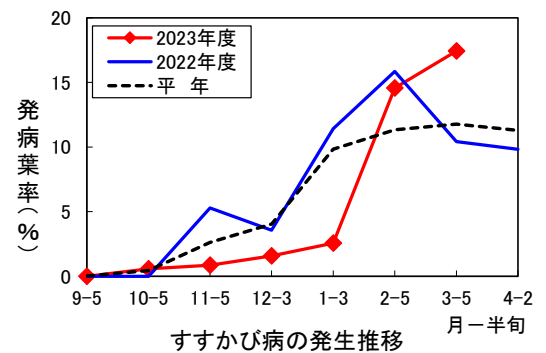
ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

発病葉率 17.4% (平年 11.8%、前年 10.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 樹勢が低下すると発病が助長されるため、樹勢が低下しないよう肥培管理に努める。
- ウ 不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光を良くする。
- エ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心がける。
- オ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。
- カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

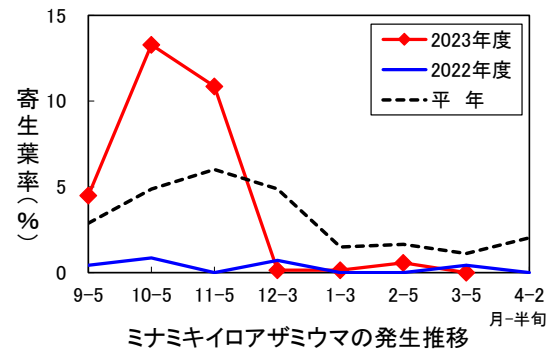
ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)

寄生葉率 0% (平年 1.1%、前年 0.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除、定期的防除を徹底する。
- ウ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないよう丁寧に薬剤散布する。また、薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響が少ない薬剤を使用する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。